

刘文兵 著

日本电影在中国

第一部中日电影交流通史

高田繁

CFP 中国电影出版社

日本电影在中国

田代百合子

著 李力 译 李力 校



100

日本电影在中国

刘文兵 著

第一部中日电影交流通史

图书在版编目 (CIP) 数据

日本电影在中国 / 刘文兵著. —北京: 中国电影出版社, 2015. 2

ISBN 978 - 7 - 106 - 04080 - 2

I. ①日… II. ①刘… III. ①电影评论—日本—现代
IV. ①J905. 313

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 007984 号

责任编辑: 张 晗

封面设计: 唐 诗

版式设计: 唐 诗

责任校对: 孙 健

责任印制: 张玉民

日本电影在中国

刘文兵 著

出版发行 中国电影出版社 (北京北三环东路 22 号) 邮编 100029

电话: 64296664 (总编室) 64216278 (发行部)

64296742 (读者服务部) Email: cfpvgb@126.com

经 销 新华书店

印 刷 中国电影出版社印刷厂

版 次 2015 年 2 月第 1 版 2015 年 2 月北京第 1 次印刷

规 格 开本/880 × 1230 毫米 1/32

印张/10.5 字数/260 千字

书 号 ISBN 978 - 7 - 106 - 04080 - 2/J · 1622

定 价 36.00 元

序

有人说电影可以超越国界，这是真的吗？无声电影的时代暂且不说，进入有声电影时代以后台词成为重要的因素，语言的障碍也开始一直困扰着电影。但是尽管如此，电影确实逐渐具有了超越不同的语言文化、政治体制，从而打动观众心灵的力量。观看全然不知的异国作品，会不知不觉被感动得不能自己，这种体验确实会发生。

刘文兵无疑是亲身体验了这种电影所带来的感动，并以此为契机立志从事电影研究的。少年时代所观看的那些日本电影给他留下了刻骨铭心的鲜明印象，也正是由此使他跨越国度，来到日本从事电影研究。

我与刘文兵的相识，是我作为论文审查者之一，参与他在东京大学提交的博士论文审查的时候。这篇论文，之后以《电影中的上海——作为表象的都市、女性、意识形态》为书名在日本出版。这篇对电影中的上海形象进行历史性追溯的论文，以它纵横论述的气势，富有生气的分析，给我留下了压倒性的印象。这无疑是在东京大学驹场校区，通过对表象文化论专业研究成果的咀嚼吸收，其独自的探求得以舒畅地展开的结果。并且，刘文兵用日语撰写的论文不但流畅易懂，而且已经带有自己的风格，留学仅十年就能够具有如此精湛的运用日语的语言能力，不得不让人惊叹。

有很多人虽然取得博士学位，但之后研究没有多大的进展，

也没有取得令人瞩目的成果，这样的事例很遗憾但屡见不鲜。但是刘文兵与之完全相反，在出色完成了“电影与上海”这一重大课题之后，随即以破竹之势活跃于日本学界，取得了灿然辉煌的研究成果，成为本书原型的《日本电影在中国》(2006)和《中日电影艺术家交流纪实》(2011)即是其中的代表作。加之《中国电影的黄金时代》(2012)，我称之为刘文兵的“青春三部曲”。因为这三部书的共通核心中有他从孩提到青年直至今天对电影一如既往的真挚的爱。正因为如此，在其论述中，时常流露出可称之为“青春特权”的纯粹的热情。

或许很多人都拥有年轻时痴醉入迷的有关电影的记忆，但是多年过后，能从专业的角度对伴随过自己成长的电影作品进行彻底的考察研究，并且对相关创作人员主要演员进行采访的，可以说是少之又少。不得不说刘文兵是一位例外的幸运的研究者，但是同时，他也付出了外人无法看到的、艰辛的钻研并收获了努力之后的幸福，这一点毋庸置疑。

通过这些著作，在撰写博士论文时就已经完美无缺的日语表达能力，更增添了专业学者作家的技巧和韵味。在“文革”风暴过后，走上邓小平主导的改革开放路线的中国，日本电影曾经是最早上映的资本主义国家的电影。第一次接触这些作品的中国观众，入迷地注视着银幕，为人物故事所陶醉的感觉，承蒙刘文兵生动细腻的文笔直接传递给了我们日本读者。可以说通过他的著作，才第一次犹如走进了正在放映日本电影的中国电影院中，与满场的中国观众一起，面向银幕画面，共享兴奋的情绪。这对日本读者来说是无以言表的珍贵而喜悦的体验。

并且，刘文兵的著作充溢着对电影的热爱，生动感人；同时，

又有作者深入细致的实证调查和深刻敏锐的思考作积淀，具备学术著作的坚实的特征。运用中日双方的资料进行叙述，具有信赖性，而鉴于当时的社会状况所进行的分析，更反映出日本电影在中国引起强烈反响的深层而多重的原因。可以说，像《追捕》、《望乡》、《生死恋》、《砂器》等作品对当时的中国观众所具有的意义，通过刘文兵的著作，脉络清晰地展现出来。

不只作为电影艺术论、文化论可以说是优异成果，而且刘文兵著作的巨大魅力，还在于对中日电影人形象的生动刻画。当我们从书中看到受到日本电影的影响，为拍出崭新的中国电影而大胆探索创新、执着追求的中国电影人的群像时，不能不感到心灵的震颤。同时，对于曾在中国引起如此轰动的电影在日本是如何创作出来的，刘文兵也通过反复的采访调查，出色地将其背景揭示出来。高仓健、佐藤纯弥、栗原小卷、山田洋次等大名鼎鼎的电影人都纷纷出现，对刘文兵敞开胸襟，提供了极为珍贵的有关中日电影史的证言。这可以说是极为精彩的，读者也可以一起共享“电影少年”刘文兵终于梦想成真时的激动。并且，对于刘文兵确切的提问，各位巨匠级人物所吐露的，超越国境的电影的巨大力量，对文化的重要性的坚定的信念，使我们也受到强烈的精神鼓舞。

欣闻刘文兵的著作的中文版，在日文版内容的基础上增加了新的部分并已决定出版，由衷地感到难以按捺的喜悦。像刘文兵这样的优秀的研究者，对日本电影进行研究，并将研究成果用广大读者都能体味和阅读的日语发表，这对我们日本读者来说是十分值得庆幸的事情。同时他的卓越的研究成果也一定要让中国读者看到，这是我一直抱有的期望。这是因为：

第一，刘文兵的著作中，通过电影这一媒介，真实生动地描写了昔日中国人民的内心世界。在任何现代社会，二三十年前的事情都会被迅速遗忘，忘却似乎成为一种必然。这种情形可能在经济极速发展的中国也会如此。所以当中国读者在看到本书中所描述的对日本电影的狂热的情形时，大概会有恍如隔世的感觉，同时也会感到难以释怀的怀恋之情吧。

第二，电影是一个社会的集体情感、精神的如实反映，同时也是能够展现梦想，并鼓舞人去实现梦想的媒体，刘文兵的研究再次给予我们这样的启示。在当前取得了巨大经济成就的中国，今后的电影艺术将会朝着什么方向发展？电影应当对社会承担怎样的职责？在思考这些问题时，刘文兵的著作会带给我们种种有益的启发。

第三，刘文兵的电影论是基于友爱的精神而撰写的著作。因电影而成为可能的交流佳话，通过一部电影而结下可贵的友情，都被鲜明地记录下来。中日友好关系对双方都具有不可或缺的重要性，这一点是不言而喻的。但是，近年来出现了很多问题，两国间的沟通也不顺畅，这是非常令人遗憾的。在这种现状下，通过文化促进交流显得愈发重要。刘文兵的著作在中国也能圆满出版，是一次珍贵的文化交流，同时也通过电影见证了两国之间的友谊。

我衷心祝愿这本书能像在日本一样，得到中国读者的热烈支持。

东京大学教授 野崎欢

2014年10月20日

序*

映画は国境を越えるといわれるが、それは本当だろうか。サイレント時代ならばともかく、トーキー以降はせりふが重要な要素となり、言葉の壁は映画にもつきまとうようになった。だがそれにもかかわらず、映画には確かに、言語や文化、政治体制の違いを越えて観る者の心を揺り動かす力が備わっているように思われる。何も知らない異国の作品を観て、理屈抜きで感動に打ちひしがれるということが確かに起こり得るのだ。

劉文兵氏は明らかに、映画のもたらすそうした感動を、身をもって深く知り、それを契機として映画研究を志した人物である。少年時代に観た日本映画の数々から受けた鮮烈な印象が氏の魂に刻まれ、ひいてはそれが氏をしてまさしく国境を越えさせ、日本で映画研究と取り組ませるに至ったのである。

私は劉氏と知り合ったのは、東京大学に提出された氏の博士論文の審査の場において、審査員の一人としてであった。その力作論文はのちに『映画のなかの上海——表象としての都市・女性・プロパガンダ』の表題で刊行されることとなる。映画における上海のイメージを歴史的に跡づけつつ縦横に論じる姿勢は、きわめてダイナミックで、圧倒的な印象を受けた。東

* 编者注、本篇文字为野崎欢教授为本书所写序言之日文原版。

大駒場キャンパスにおいて蓄積されてきた表象文化論の成果をよく咀嚼吸収したうえで、独自の探求がのびのびと展開されていた。しかも劉氏の書く日本語の文章は、読みやすいというだけでなくすでにして風格を帯びており、留学してまだ十年たっていない時点でこれだけ見事に日本語を操るその言語能力の高さに、嘆息せずにはいられなかった。

博士の学位は取ったものの、その後研究をあまり進展させず、目立った業績が挙げられないという例は残念ながらしばしば見受けられる。劉氏の場合はまさにその正反対で、映画と上海という大きなテーマを見事に論じ切ったのち、いよいよ破竹の活躍を示すこととなった。とりわけ燦然と輝く業績が、本書の原型となった『中国 10 億人の日本映画熱愛史』（二〇〇六年）、そして『証言 日中映画人交流』（二〇一一年）である。それに『中国映画の熱狂的黄金時代』（二〇一二年）を加えた三作を、私はひそかに劉文兵の“青春三部作”と名付けている。というのも、これら三作の核心には子どものころから青年期にかけて劉氏の心を揺さぶった映画作品に対する、いまだ変わることのない真率な愛があり、それゆえ記述にはときとして、まさに青春の特権と思えるような純粋な情熱の発露が感じられるからである。

おそらくだれしも、若いころに夢中になった映画の記憶を持っているものだろう。しかし長じてのち、その作品について徹底して考察し、さらにはその作品を製作した関係者や主演俳優に取材調査を行うほど一途に打ち込む者はきわめて稀だろう。それは劉氏が例外的な幸福に恵まれた研究者だということにほかならない。しかし同時にもちろん、それは傍からは窺い知れぬほどの厳

しい研鑽と努力の末に勝ち取られた幸福であるに違いない。

これらの著作をとおして、博士論文の時点ですでに完璧であった劉氏の日本語能力は、いよいよプロの文筆家としての巧みさと味わいを加えるに至った。文革の嵐が過ぎ去った後、鄧小平による改革開放路線に転換した中国において、日本映画は初めて公開された資本主義国映画だった。その諸作に接した中国民衆が、夢中でスクリーンに見入り、そこに映し出されているものに魅了された心もちが、劉氏のしなやかな文章のおかげでわれわれ日本人読者にもストレートに伝わってくる。いわば日本人は劉氏の著作によって初めて、日本映画を上映中の中国の映画館の中に入り、満員の中国人観客とともに画面に向かい合う興奮を味わうことができたのである。それはわれわれにとっては何ととっても貴重な、嬉しい体験である。

しかも劉氏の著書は、映画への豊かな愛情に支えられ、いきいきとしたエモーションの脈打つものでありながら、同時にまた徹底した調査と鋭敏な思考に裏打ちされた、研究書としての性格をも確固として備えている。日中双方の資料を駆使しての記述は信頼性があり、当時の社会的状況を鑑みての分析は、作品受容の深いメカニズムをよく照らし出している。『君よ憤怒の河を渉れ』や『サンダカン八番娼館 望郷』『愛と死』や『砂の器』といった作品が中国人にとってもった意味は、劉氏の仕事によって限なく明らかにされたといつていいだろう。

映画芸術論、文化論として優れた業績というだけでなく、さらに劉氏の著書の大きな魅力は、そこに描き出された映画人群像の面白さにもある。日本映画の衝撃を受け止め、そこから

新しい中国映画の創造のための指針を引き出そうと懸命に試みた中国の映画人たちの真剣な姿勢には胸を打たれずにはいられない。同時に、ではそれほどのインパクトをもたらした作品を、日本側ではどのように作っていたかについても、劉氏はインタビュー調査を重ねることによって、見事にその背景を浮き彫りにして見せた。高倉健、佐藤純彌、栗原小巻、山田洋次といったビッグネームたちが次々と登場して劉氏に胸襟を開き、多くの貴重な証言をもたらす。その様はまさに圧巻であり、映画少年・劉文兵の夢がついにここで実現したかのような感激を読者も共にする。そしてまた、劉氏の的確な問いかけに応じて各巨匠たちが吐露する、国の違いを超えて訴えかける映画の力、文化の重要性への熱い信念に、われわれも強く精神を鼓舞されるのだ。

このたび、劉氏の著作の中国語版が、日本語版の内容をさらに増補した決定版として刊行される運びとなったと聞き、まことに欣快に耐えない。劉氏のような優秀な研究者が、日本映画について研究し、その成果をだれにでも味読できる日本語で発表してくれることは、われわれ日本の読者にとってはこのうえなく有難いことである。しかし同時に、彼の卓抜した仕事をぜひとも中国の読者にも読んでほしいという思いを私はずっと抱いてきた。それは第一に、劉氏の著作には、映画という対象をとおして、一昔前の中国人民の心情が実にいきいきと活写されているからである。現代においてはどんな社会でも、二十年、三十年前の事柄は急速に忘れられ、失われていく定めにある。経済的に未曾有の急成長を遂げた中国においてはなおさらであろう。中国の読者は、日本映画に熱狂した人々の姿に隔世の感

を覚えつつ、しかし同時にたまらない懐かしさをも感じるのではないだろうか。

第二に、映画が社会の集団的なメンタリティーを如実に反映し、また同時に人々の夢を大きくふくらませ、具現化するメディアであることを、劉氏の研究は改めて教えてくれるからである。いまや巨大な発展を成し遂げた中国において、映画はどういう方向へ向かうのか。そして映画は社会にとってどんな役割を担い得るのか。そうした問題を考えるうえで、劉氏の著作は様々な有益なヒントを含んでいるはずである。

そして第三に、劉氏の映画論は友愛のしるしのもとに書かれた著作である。それは映画によって可能になる交流の素晴らしさ、一本の作品によって結ばれる絆の尊さを鮮やかに浮き彫りにしてくれる。日中の友好関係が、互いにとって不可欠な重要性をもつことはいうまでもなく明らかである。だがそれにもかかわらず、多くの問題が出来し両国間の意志疎通が必ずしも円滑にいつていないのは何とも残念なことだ。そんな現状にあって、文化によって人々が結びつくことの大切さはいよいよ増している。劉氏の著書が満を持して、中国でも刊行されることは、まさしく一つの貴重な文化交流の実現であり、映画によって両国間にもたらされ得る友愛のあかしとなるだろう。

私は本書が日本においてと同様の熱い支持を、中国においても得られることを心から願うものである。

野崎 敏

2014年10月20日

目 录

前 言 高仓健为何出演张艺谋执导的中国电影? 001

第一章 战争与电影 009

(一) 上海篇 010

战前虹口地区的日本电影放映 010

“孤岛”及沦陷时期的日本电影上映 012

上海租界放映的第一部日本剧情片《暖流》 017

日本电影挑战好莱坞? 023

风云变幻的上海电影界 027

军事占领与现代性 032

《春江遗恨》 038

中国人眼中的日本电影 044

有关电影节奏的问题 047

热情与冷淡——两国电影人的温差 051

(二) 东北篇 057

东北地区电影放映简史 058

“日系馆”和“满系馆” 062

上海电影一枝独秀 064

乏人问津的日本电影 066

“满洲映画”的困惑 073

第二章 日本左翼电影在中国 081

(一) 日本独立电影的艰难跋涉 082

共鸣与声援 096

中日电影人情深谊长 104

(二) 电影交流的挫折与延续 110

化为泡影的日本电影赠送计划 111

日本电影人看中国 112

第三章 日本的光与影 119

(一) 令人眼花缭乱的繁华日本——《追捕》 121

现代都市体验的冲击 122

中野良子和真由美 128

神秘的裸戏 130

(二) 阶级压迫·思想解放——《望乡》 132

裸露镜头的处理 134

感伤的叙事口吻 136

“解放思想运动”中的日本电影 139

第四章 人情和人性的回归 143

(一) 人性主题的深化 144

难忘《人证》《阿西们的街》 144

人性美和人情美的复苏 150

(二) 爱情啊，你姓什么？——《生死恋》 152

两国观众的不同反响 152

与《冬日恋歌》的异同 158

(三) 宿命·弑父情结·历史记忆——《砂器》 161

人性主题的深度挖掘 161

被唤起的历史记忆 165

第五章 第四代、第五代导演与日本电影 171

- (一) 中国新浪潮电影的先驱者——第四代导演 174
- (二) 第五代导演和日本电影 180
- (三) 从银幕到现场——合拍片《一盘没有下完的棋》 185
 - 一波三折的拍摄过程 185
 - 《一盘没有下完的棋》和中日关系 187
 - 有关电影化的思考 189
- (四) 改编自井上靖小说的中日合拍片 193
 - 《天平之薨》的中国之旅 193
 - 《敦煌》之梦 196
- (五) 电影交流的多样化 203
 - 东洋洗印所 (IMAGICA) 与中国电影 203
 - 电影剧作家的交流 204

第六章 高仓健和山口百惠的神话 207

- (一) 寻找男子汉——高仓健在中国 208
 - 阳刚之美的化身 208
 - 中国的高仓健们 212
- (二) 明星与偶像——山口百惠的启示 215
 - 山口百惠的两副面孔 215
 - 山口百惠的复制与传播 218
 - 明星制和偶像的概念 219

第七章 日本电影热的背后 221

- (一) 由喧嚣走向沉静 222

(二)“日本电影周”的举办与德间康快 227

(三)日本电影热的衰退 232

第八章 日本电影热的延续

——80年代的日本电视剧 235

(一)《血疑》中的家庭形象 236

(二)《排球女将》与中国的体育振兴运动 241

(三)《阿信》与“阿信精神” 245

(四)首部中日合拍电视剧《望乡之星》拍摄纪实 252

长谷川照子其人 254

酝酿与策划 257

创作阵容 261

从协拍到合拍 262

中日双方不同的观剧感受 268

结 语 275

(一)“日剧”的流行与中国白领的出现 276

(二)日本动画片的人气 279

附 录 影片一览表 283

参考文献 307

后 记 315